

社会委員会通信

43

2012.9.2

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

2012年の平和聖日の午後の講演会には、三・一教会の平良愛香先生をお招きし、「沖縄を知る覚悟がありますか」という題でお話をいただきました。

沖縄ご出身でいらっしゃる平良先生は、冒頭、ピアノと三線で、沖縄の歌を歌ってくださり、また、沖縄の有名な「ていんさぐぬ花」を先生の伴奏で合唱して、会場を「平良ワールド」に惹き込んでしまわれました！

「沖縄の歴史を語るときには、どこまで語ってよいのか、と戸惑う。なぜなら、語る方も聞く方も傷つくから・・・」と、はじめに先生が言われた言葉に象徴されるように、今まで「本土」に生まれ育った者が知らなかった、辛く、悲しい事柄が、沖縄生まれの平良先生の口から直接語られ、驚きと、何とも表しがたい思いが、聞いた私たちそれぞれの心の中に広がっていったことと思います。

何とも柔らかな沖縄のお国言葉を交えた平良先生の語り口の中にも「沖縄を知る覚悟がありますか」のはっきりとした私たちへの問いかけが、ピンピンと響き渡るような2時間でした。先生の講演を確かに聞いた私たちは、その次にいかに一歩前へ踏み出すか、それぞれにその行動が問われているように思います。

参加者は56名（男性13名、女性43名）でした。参加者の皆様、ありがとうございました。

（社会委員長：Y.M）



沖縄を知る覚悟がありますか

三・一教会牧師：平良 愛香

はじめに「ちんぬくじゅうしい」のピアノ弾き語り。歌ののち、歌詞の説明と沖縄の言葉の独自性、独立した言語なのか、日本語の一方言と考えるのか、どこを中心とするのかで、呼び名すら「ウチナーグチ・沖縄方言・琉球語」などと替わってくることの説明。

それから、琉球音階の説明（基本的にレとラがない）、三線（サンシン。蛇皮線ではない）の紹介。みんなで一緒に「ていんさぐぬ花」を合唱。



沖縄と琉球と琉球弧（地理的な区分）

あまり詳しく知らなくてもいいことかもしれませんが、日本の南の方に沖縄県というのがありますね。どういうふうにあるかということをやっと書いてみました。

- 九州島から台湾島までの1,300kmの海上、188の島々、それが琉球列島。（これに大東諸島と尖閣諸島が加わり南西諸島（199島））
- 与論島から北38島が薩南諸島（鹿児島県）南161島が琉球諸島（沖縄県）
- 境目は北緯27度線ということになっている。
- 沖縄県は沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島、大

東諸島、尖閣諸島があるが、沖縄と言う時、別の歴史や文化を持つ宮古や八重山とは切り離して考えることも必要。

北緯 27 度線より南側が沖縄ということになっています。実は厳密に言うと、沖縄県の中の硫黄島という島だけは 27 度線より北に飛び出ているんですけど、それは無人島になっています。そこをちょっと隠すと、27 度線より南が沖縄県ということになっています。民俗学的には日本の大きな流れ、文化とか民族とかがあるのでしようけれど、でも今、言葉が違う、音階が違うというように、よその国と言ってもいくらい違う文化があるということ、まず心に覚えてほしいと思います。最初から日本だったと言うと、無理があるかなと思います。違う文化を持った地域がそこにありました。

沖縄県には沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島、大東諸島、尖閣諸島がありますが、沖縄と言った時、別の歴史や文化を持つ宮古や八重山とは切り離して考えることも必要です。最近、沖縄人はこのことを大切に考えるようになってきました。沖縄の歴史と言った時に、実は宮古、八重山は別な歴史を持っていることがあるのに、切り落とされることがあります。首里王朝のあった沖縄島、沖縄本島と言うことも多いのですけれども、この言葉、ちょっと引かかるんですね。何を基準に本島としたのでしょうか？ 県庁所在地があるから？ 面積が一番広いから？ 「本」という言葉を使う時、ちょっと注意した方がいいですね。周りは「おまけ」みたいに見られますから。宮古にいる人は宮古が中心、八重山にいる人は八重山が中心になるので、そういう人たちは沖縄本島と言いません。沖縄と言います。宮古の人たちは、「沖縄に行く」という言い方をします。彼らは、いわゆる社会的に言われている沖縄と一括りにされたら困る文化や歴史を持っています。沖縄と言った時に、沖縄本島を中心とした沖縄諸島のことを言っているのか、宮古、八重山も含めた沖縄列島のことを言っているのかということで、随分ニュアンスが変わってきます。多分、テレビ

とかニュースとかで沖縄と言った時に、全くそれは意識していないでしょうね。そう言ったことに気がついてほしいと思いました。



沖縄の歴史

14 世紀後半：沖縄島（沖縄本島）に 3 つの小王国が起こる。（日本では室町時代）

15 世紀：尚巴志（しょうはし）による統一琉球王国。中国や東南アジアとの貿易が盛んになり、日本とアジアの間の国際都市となる。（日本は戦国時代）

16 世紀後半：中国の密貿易商人や海賊の増加とポルトガルの進出によって貿易が難しくなり、日本への依存が強くなる。薩摩が琉球支配を企て始める。

1609 年 3 月：薩摩の軍勢が琉球侵略。国王（尚寧王）と重臣たちは捕虜となる。但し、鎖国に入った日本は、中国との貿易を続けさせるために、琉球王国の名前は残した。（琉球は島津氏の支配下幕府公認の中国貿易の窓口となる）

約 270 年間：近世琉球時代。サツマイモやサトウキビが中国から伝わる（日本は江戸時代）。日本史では 1853 年のペリーの黒船来航が初の黒船来航とされるが、ペリーは浦賀より先に琉球に来航しており、それよりも前にフランス、イギリスの軍艦が来ている。日本史では琉球はまだ外国。

1871 年：明治政府による廃藩置県。しかし「琉球王国」をいきなり「沖縄県」にするのは反発が多いと考え、琉球のみ段階を踏んで行われた。

1872 年：琉球王国 琉球藩

1879 年 3 月：琉球藩 沖縄県 警官 160 人、軍隊 400 人による強行。「琉球処分」と言う。天皇を中心に日本国家への「同化」が始まり、少しでも「日本人」になるような教育がなされるよう

になる。「同化」の最大の障壁となった琉球方言は絶滅の対象となった。共通語（日本語）こそ正しい言葉であるという考えは、大変大きな影響を残した。私（平良）が小学生の頃ですら、学校で方言を使うと注意された。

1945年3月下旬～8月：沖縄戦。日本が降伏したのは8月15日だが、沖縄ではその後も戦争は続き、降伏調印は9月7日になっている。

1952年4月28日：日本が占領状態を脱する代わりに沖縄を切り離した。「第二次琉球処分」とも言う。アメリカの支配下での琉球政府20年間。この間に私の父は「日本」に「留学」、母と「国際結婚」、「本土（アメリカ）」に「留学」を体験している（日本、アメリカのどちらに行くにもパスポートが必要だった）。

1972年5月15日：沖縄の希望を打ち崩した、基地そのままの「復帰」。「第三次琉球処分」と言う人もいる。あえて「復帰」と言わず、「施政権返還」と言うこともある。

沖縄の歴史を書いたのですが、自分で書いておきながら、実は宮古、八重山のことは入っていません。問題にしないといけませんね。今回、「沖縄を知る覚悟がありますか」という、ちょっとどきっとするテーマにしましたが、実は私は今、この瞬間、すごく緊張しています。どこまで話していいのかな、皆さんにどれだけ覚悟があるのかなという思いと同時に、私にどれだけそれを語る覚悟があるのだろうか。本気で沖縄のことを語り出すと、言う人も聞く人も傷つきます。そういう重い歴史があります。これ以上私が話すのを耐えられないと思ったら、そこでブレーキをかけるかもしれません。皆さんが聞いて辛そうと思ったら、ブレーキをかけるかもしれませんが、それをちょっと覚えていただきたいと思います。

あとで資料をゆっくり読んでいただいてもいいのですが、要は、琉球王国という別な国だったということを書いてみました。日本では室町

時代の時に、沖縄島（沖縄本島）に3つの小王国が起きました。日本が戦国時代に入った時に、琉球は統一王国になります。それから、薩摩が琉球支配を企て始めて、1609年3月に薩摩の軍隊が琉球を支配するのですが、この後の270年間、近世琉球時代と言って、この時代がとても歴史的に複雑な時代です。琉球が日本の一部に組み込まれていたのか、独立国であり続けたのか、それは歴史学者の中でも意見が分かれます。沖縄の中でも意見が分かれます。だから、これが正しいというのがないのですけれど、明らかなのは、沖縄が独立国だった時代と、そのあとで薩摩によって侵略されて日本に組み込まれていったという歴史があるということです。

ちなみに、ペリーのことを少し書きました。1853年、ペリーの黒船来航が初の黒船来航と日本史では習いますが、ペリーは琉球には浦賀より先に那覇経由で来ています。でも、そういうことは日本史では習わないですね。日本の歴史にはあまり関係ないですよ。琉球はよその国だからということなのでしょうね。明治時代になって、琉球が沖縄県になっていく経緯が書いてあるのですが、そうすると、私は沖縄で生まれ育ったのですけれど、学校で習った日本史は外国の歴史なのです。江戸時代が終わるまで。何で外国の歴史を私たちの国の歴史として学ばないといけないのだろう、おかしいなあという思いがずっとありました。もちろん郷土史という沖縄の歴史も習いますが、きっと高校受験とか大学入試とかには日本史が出て来るでしょうね。当たり前と言えば当たり前なのかもしれませんが、非常に疑問が私の中には残っています。

さて、廃藩置県って聞いたことがありますね。日本中にある藩を日本が支配していることを明らかにするために、藩を止めて県にする。廃藩置県は1871年です。ところが、その翌年の1872年に新しく藩が出来たのです。廃藩置県のあとで琉球藩が出来たのです。知っていましたか？日本史でやりませんね。藩を止めたくせに、新しく藩を作って、琉球王国を日本の支配下にしました。1879年に沖縄県になります。これは話

し合っどどのようにしましょうではなくて、軍隊と警察がどっどやって来て、「今日から沖縄県です」と言ったのです。

ちょっと私は偏った説明の仕方をしているかもしれませんが、非常に乱暴に琉球が日本に組み込まれていったのだなあとということを、どの記録を見ても感じます。沖縄の人は抵抗しなかったのかと言うと、相当抵抗した人たちがいます。闘って亡くなっている人もいます。それから、自害した人もいると聞いています。そういう中で、琉球王国は沖縄県の中に組み込まれていきました。

相当割愛して話しています。その時に、明治政府は新しく沖縄県になった人たちに、「お前たちは日本国民だ」と言いました。天皇を頂点とした国を作るという政策が強まったので、琉球の人が日本国民になるように徹底的に皇民化運動が強まります。日本中の小学校に天皇の写真が配られた時、先に沖縄に配られたのです。一番時間をかける必要があると思ったようです。そして、琉球語が禁止されました。日本国内で、その地域の言葉が禁止されたところは、(何を見て国内と言うかにもよりますが)沖縄ぐらいではないかと思ひます。もちろん、大陸に同じような政策を押しつけた歴史はありますけれど、今、日本国と言われている中でそれを経験しているのが沖縄です。徹底した皇民化教育だったので、何を徹底したかと言うと、罰するというところもありましたけれど、沖縄の文化、沖縄の言葉は劣ったものだという意識を植えつけました。困ったことに、それが成功してしまいました。沖縄の人たちは沖縄の文化を捨てること、沖縄の言葉を捨てることいいことだということを植えつけられたのです。「沖縄の言葉しか話せないのは劣等生だ、日本語を話せるのが優等生だ」という、今考えると、すごく問題があるのですけれど、その当時、それが本当に浸透していったので、学校ではもちろん方言は禁止でした。有名な方言札というのが出て来ましたね。学校で方言を使うと、見せしめに方言札を首から掛けさせられました。



私が小学生だった頃、そんなに昔じゃないですよね。もちろん戦後ですけど、まだ小学校は方言禁止でした。とっくに戦争は終わって、日本に復歸したあとだったのに、学校で方言を使うと、とがめられました。小学校には、帰りの会みたいのがあります。授業が終わった時に、「今日の反省ありますか」みたいな、何の目的でやっているのか未だによく分からないのですが、「君が悪いことをした」と言う会みたいなものです。その中で、「はい、今日も君が方言を使いました。悪いと思います」というのが出てくるのです。そうすると、君が「もう話しません。反省します」と言うのです。恥ずかしいことに、私はいつもチクる側でした。と言うのは、父は、いわゆる優等生だったので。優等生というのは、沖縄の言葉を一切使わないで、日本語をマスターした生徒。父の日本語はとてもきれいです。日本語をマスターした外国人のように、文法がきちっとしています。その代わり、「どこの国の方ですか？」と聞かれるくらい、イントネーションがおかしかったらしいです。父はそういう人でしたし、母は和歌山出身の女性でしたので、家の中でウチナーグチを話されることは、まずありませんでした。だから、私は方言を身に付けられない。しかも、学校では、沖縄の言葉は良くない言葉と教わっていますから、日本語が上手な私は、変な言い方ですが、どんなことがあっても、琉球語が思わず口から出ることはありませんでした。今考えると、羨ましかった部分もあります。沖縄の子が、とっさに沖縄の言葉で話しているのに、入っていけない。そういう思いが、実はあったなと思ひます。

そういう中で、琉球語、沖縄の言葉が絶滅の対象とされたのが明治時代、大正時代、昭和時代、戦争が始まっている中で、ずっとそれはありました。もう一つ難しいのは、琉球語と言うか、沖縄方言と言うか、分かれまひます。言語学的にいろいろ言うことも出来るのですが、沖縄の人の中には、これを琉球語と誇りを持って言う人と、「いや、沖縄は方言です」と言うことにこだわる人がいます。琉球語は劣ったものだとい

うことを徹底的に植えつけられている世代は、自分たちの文化として、その言葉を取り戻したくても、日本語と違うものと言われることに抵抗があるのです。「一方言として認めてほしい。でも、私たち日本人なのです。日本人じゃないと言って、排除しないで」みたいに思っている人たちもたくさんいます。

実は最近、沖縄の青年たちに「あなたは日本人ですか、沖縄人ですか？」というインタビューがあったそうです。みんな口を揃えて、「沖縄人ですよ」と答えます。そんな簡単に日本に同化されてたまるかという誇りがあるのです。ところが、「じゃあ、日本人じゃないのですね？」と言うと、慌てて「いえ、日本人でもあります」と言います。「日本人じゃなくて、沖縄人です」と堂々とと言えるところまで、ウチナンチュとしてのアイデンティティを取り戻せていないのだとされています。いろんな国の少数民族が同じ経験をしているみたいです。ハワイの人たちに「あなたはアメリカ人ですか、ハワイ人ですか？」と聞くと、「ハワイ人です」と堂々と答えるのに、「じゃあ、アメリカ人でないのですね？」と聞くと、慌てて「アメリカ人です」と言います。言葉を奪われたり、名前を奪われた経験のある人たちほど、それを取り戻す行為にいかないと、同化していくことがいいことだということから抜けられません。

沖縄はそういう経験をしてきました。そして、太平洋戦争。沖縄でたくさんの犠牲が出ました。ただ単純に沖縄という島が戦闘の盾になったからと言うだけじゃないこともご存知ですね。沖縄の人たちは、日本人になれという教育を徹底的に受けていたので、日本のために死ぬのがいいことだと思っていた人が多いのです。全員ではないでしょうけれど、それで死を選んでしまった、徹底的に軍に逆らうことが出来なかったということがありました。沖縄の言葉を使ったために、スパイと見なされて殺された人もたくさんいることが知られています。

沖縄の戦争がいつ終わったか、皆さんご存知ですか？ 一応 1945 年 6 月 23 日ということになっています。日本軍の沖縄部隊のトップだっ

た牛島満司令官が自害をした日が 6 月 23 日とされているので、その時をもって沖縄戦の組織的な戦争は終わったということになっています。ですから、今でも 6 月 23 日は沖縄では特別な日なのです。「慰霊の日」と条例で決まっています。学校とか役所はお休みになります。けれども、実際には 6 月 23 日に戦闘が終わったわけではありません。まだまだ戦闘は続いて、しかも困ったことに、牛島司令官は「最後の一人まで戦って死ぬ」と言い残して自殺してしまったものですから、戦闘がずっと続いていきます。そして、あまり知られていませんが、8 月 15 日を過ぎても、沖縄では人が死んでいるのです。実際に戦闘を止めますという調印がなされたのは 9 月です。そういう沖縄戦が沖縄でありました。

そのあと何があったかと言うと、日本が沖縄を切り捨てたのです。それが 1952 年 4 月 28 日です。日本が占領状態を脱する代わりに沖縄を切り離れた「第二次琉球処分」とも言います。第一次琉球処分というのは、さっき言った琉球王国が明治政府によって沖縄県になった時です。政府が琉球処分という言葉を使ったのです。琉球をなくす、という意味です。1952 年、一旦沖縄県になった沖縄が、日本が独立する代わりに切り捨てられたのです。

その後、アメリカ軍が支配する琉球政府が 20 年間続きます。この間に私が生まれているのですけれど、ちなみに父はその間に沖縄から東京に留学しました。国が違うから、パスポートが必要なのです。そこで和歌山の女性と知り合って、国際結婚をしました。沖縄と和歌山で国際結婚になるのです。ハーフが生まれたのです。生まれた時はハーフだったのです。今は「半分」ではなくて、「両方」という意味で、「ダブル」という言葉を使うことが多いですけれど、私は生まれた時はダブルだったのです。4 歳になるちょっと前に、いわゆる日本人になってしまいました。とっても不思議な経験をしていると思うのですが、沖縄が日本になったのは、1972 年 5 月 15 日。「沖縄の希望を打ち崩した」と書きました。「沖縄が復帰してよかったね」と言う人もいっぱいいたようですけれども、沖縄の人

は喜んでいなかったということを皆さん知っていますか？

沖縄が復帰を望んだ理由は、軍隊があることによって、ものすごい犠牲を強いられていたからです。暴力や殺人、女性たちへの暴行が絶えず起きていました。それなのに、米軍は全部無罪になっていました。横断歩道の信号が青になったから渡って来た小学生の男の子が、信号を無視した米軍のトラックに轢かれた事件がありました。米軍のトラックの運転手は、「夕日がまぶしくて、信号がよく見えませんでした」と言ったので、無罪になりました。そういう時代でした。沖縄の人は基地があることで、そういう苦しい時代を過ごしていました。

もう一つ、沖縄の人が復帰を望んだ理由があります。理由はいっぱいあるのでしょけれど、大きい理由。私は1968年の8月18日に生まれました。1968年はどんな時代だったか。結構世界が変動した時代です。身近なところでは、ベトナム戦争の真っ最中です。ベトナム戦争というと、「アメリカとベトナムの戦争」と書くと、試験で丸がもらえんと思いますが、その頃、沖縄はアメリカの一部でした。ベトナム戦争に沖縄は入り込んでいるのです。但し、ベトナム戦争中、沖縄には爆弾は一つも落とされませんでした。ちょっと皮肉な言い方ですが、アメリカは戦争が上手なので、自分の領土には爆弾を落とさないのです。相手を攻撃するのが上手な国だったので、沖縄には爆弾は一個も落ちなかったのです。沖縄は落とす側にいました。毎朝、沖縄からベトナムに飛行機が飛んで行って、爆弾や枯葉剤を撒いて、夕方戻って来るのです。沖縄で燃料を補給し、爆弾を積み込む。ベトナムの人たちは沖縄のことを、「恐怖の島」と言っていました。自分たちを殺す拠点ですからね。沖縄に民衆がいるなんて、考えもしなかったと言われました。基地しかイメージ出来ない。沖縄の人たちはどうしていたかというと、あの太平洋戦争の傷を負っている、もう二度と傷を負いたくない、誰にも負ってほしくないと思っているのに、今度は自分たちの島が戦争の加害者になっている。産業が充分ではありませんので、

基地で働くしかない人がいっぱいいるのです。何をするかというと、泥や人間の肉片とかがついている戦車を洗ったり、防弾チョッキを繕ったりする仕事。イヤです。でもそういう仕事をすると、それが直ってまた戦場に行く。私たちは戦争の手伝いをしている。でも、サボるわけにいかないのです。仕事が首になったら、食べていけませんから。自分たちの出来るわずかな抵抗は、仕事をなるべく遅らせる、納品を遅らせることだったのです。でも、最終的には納品してしまうのです。「ああ、また戦争に加担してしまった」。沖縄に基地があるということは、戦争の加害者になることでもあるということ、沖縄の人たちは身に沁みて感じています。政府は負担軽減、負担軽減と言いますが、被害者であることを止めたいだけじゃないのです。基地があると加害者になるということ、沖縄の人たちは実感しているのです。それで基地は嫌だと言っているのです。

その頃、ミサイルを積んだトラックが沖縄の国道を走っていました。沖縄の人たちは「止めてー」と飛び出して行きたかったけれども、出来なかった。それは勇気がないからではなくて、自分が飛び出して行ったところで、轢かれてそのままおしまい、無駄死になってしまう。そういう中で、私の両親はクリスチャンですから、必死に祈りました。「神様、戦争がやっと終わった。平和を約束してくれたんじゃないのですか？ それなのに、今のこのありさまは全然平和ではありません。私たちの泣き叫ぶ声が聞こえませんか？」それが旧約聖書にあったのです。「哀歌」にあったのです。それで、その時に生まれた子どもに「あいか」と名づけたのです。私の名前は元々「哀しみの歌」という意味です。字だけ変えたと言っていました。たまたま私は性差別の問題とか、セクシュアル・マイノリティ、同性愛者とか性同一性障がいの人たちの人権の問題とかをやっていますので、「平良さん、愛香というのはジェンダー・フリー、性別を乗り越えるために、自分でつけた名前ですか？」と聞かれることがあるのですけれど、そうじゃないのです。私の名前は沖縄の歴史から生まれ

て来たのです。平和を泣き叫んで求めた両親の祈りなのです。すごい名前をもらったと思っています。あとで両親に聞いたら、「ただ泣き叫んだだけじゃないよ。必ず実現するという希望をその名前に入れたんだよ」と言われました。午前中、似たような話をしましたね。そういうわけで、沖縄には基地があって、沖縄の人たちは被害者にもなったけれど、加害者にもなるということに気づかされました。それが、基地があるということです。

それで、日本には憲法9条が出来たらしいということを知るので。軍隊を持たないという憲法が、日本には新しく生まれた。だったら、私たちが切り捨てた日本だけれど、今一度一つになりたい。それが沖縄が復帰を望んだ理由です。ただ単純に祖国に帰りたいというわけではありません。元々祖国でも何でもないので。自分たちを侵略してきた国、そういう思いも沖縄人にはあります。同化したいという思いと同時に、自分たちを踏みにじた国という思いがずっとあります。だけど、その日本に入りたい。それは憲法9条があるから。日本に自分たちが戻ったら、沖縄から米軍基地がなくなる。自分たちが被害者でなくなると同時に、加害者でもなくなる、という大きい願いが、祈りがそこにあったのです。けれども、復帰が近づいて来て分かったのは、基地はそのままだということでした。沖縄の人たちは愕然としました。裏切られたと。5月15日は、沖縄では復帰反対運動がピークに達しています。東京の新聞には、「青空の下、日の丸を振って歓迎する沖縄県民」という写真が載ったらしいですけれども、その日はどしゃぶりだったのです。やらせ写真ですよ。本当に沖縄の人たちは、悔しくて泣き崩れた日だったと聞いています。ですので、ある人たちは、この日のことを「第三次琉球処分」、沖縄がまた踏みにじられた日と言っています。あえて「復帰」と言わず、「施政権返還」と言うことも結構あります。

で、その結果、沖縄には米軍基地がいっぱい残りました。復帰前からありましたけれども、復帰後も残りました。しかも、それまでは、ア

メリカという戦争に勝った国に押しつけられていたという感覚が、今度は自分たちの日本という国がそれを自分たちに押しつけているという状況です。沖縄の人たちがよく怒りを表すのはアメリカに対してではありません。日本に対してです。よく日本人観光客が沖縄に来て、「沖縄はいいですね。」と言うと、沖縄の人たちは、にこにこしながら、ものすごくいらいらしていることが多いのです。こんなことを言うと、みんな沖縄に行けなくなりますね。でも、来てほしいのです。見てほしいのです。そういう思いを込めて話しています。



沖縄の米軍基地

沖縄県の面積は、日本の国土面積の0.6%しかないのに、日本の米軍基地の75%があります。これは、比率としては異常です。自治体の半分以上が米軍基地の街です。嘉手納(かでな)町85%、金武(きん)町60%、北谷(ちやたん)町58%、宜野座(ぎのざ)村52%。半分以上が米軍基地にありますし、沖縄県の土地の10%が米軍基地です。沖縄島(本島とも言う)の20%が米軍基地です。そういう状況が今もあるので、「基地の中にオキナワがある」と言われます。

頑張って基地を減らしている人たちもいます。伊江島、小さな島です。そこは阿波根昌鴻(あはごんしょうこう)さんというおじいちゃんがすごく頑張って、3分の2米軍基地に取られたところを半分以上取り返して来ました。阿波根さんは農民です。何をしたかと言うと、「あなたたちがここに基地を作ったので、私たち農民は生きていけません。返して下さい」ということをしつこく、そして丁寧に言い続けました。阿波根さんは「沖縄のガンジー」と言われるのですけれど、いくつかルールを作りました。大きな声を出さない。座って話をする。手にもものを持たない。手を耳より上に上げない。それから、相手よりも多い人数で話さない。すなわち相手を威圧したらいけない、ということを徹底して実践したのです。そして、相手は知らないでやっているのだから、知っている私たちが教えて

あげるといふ気持ちを忘れない。それをやり続けて、伊江島は基地に取られたところを少しずつ取り返して来ました。

それから読谷村、ここもすごい働きをしました。基地がいっぱいありましたけれど、実際に今使っていないじゃないかという場所を「返してくれ、返してくれ」と言い続けて、実際にその中に村役場を建ててしまったり、村の施設を作ったりしました。そして、実質自分たちのものにして取り返していくということをしたり、最後には、村長がアメリカの大統領に直訴しています。これは日本の外務省にこっぴどく怒られました。日本政府を通さないで、小さな村の村長が勝手にアメリカと交渉を始めてしまったからです。怒られたけれど、実を結びました。「それは知りませんでした」と言って、返してくれたのです。そういうことを沖縄はし始めています。



なぜ沖縄に基地が集中しているのか？

- ・太平洋の「かなめ石」。地理的には東アジアをにらむ絶好の戦略的位置。(沖縄からだ、台湾だけでなく、上海や香港が東京よりも近く、フィリピンもほぼ同距離。コンパスで円を描くと、本州より先に朝鮮半島やルソン島が入る)
- ・戦争が終わり、人々が収容所から出て村に戻ってみると、広大な土地がすでに基地として鉄条網で囲い込まれていた。さらにその後10年以上も銃剣とブルドーザーによって土地収用は行われた。
- ・合法化の名の下で土地賃貸契約をさせられる。(たばこ1箱10円の時代、1坪1円8銭を20年契約一括払いで。一度契約すると20年は何も言えない)
- ・さまざま米軍、米兵による事故、事件。しかし沖縄はそれに対し裁判する権限がなかった。沖縄が復帰を望んでいた最大の理由は、米軍基地からの解放だった。「被害者にも加害者にもなりたくない」。しかし基地は縮小されず、しかも今度は日本政府の「思いやり予算」によって基地の恒久化が進められている。

「思いやり予算」。ベトナム戦での挫折でドル安、経済赤字になったアメリカは、日本に駐留経費の分担を求めた。条約協定上根拠なしとしつつも、1978年より日本は「思いやり予算」として出すようになった。予算は年々ふくれあがり、基地と諸施設の建築費のほとんどは日本が出すまでとなっている。毎年2,000億円以上。

なぜ沖縄に基地が集中しているかということを書きました。戦略的にはすごく便利なおところにあるからと言われてはいます。資料に思いやり予算のことを書きました。日本はどうも米軍にいてほしいらしい。よく分かりませんが、そうすることによって、日本が守られるという神話があるのかもしれませんが。沖縄の人たちはあまりそう思っていない。戦争で被害を受けた、軍隊があるところですから。

慶良間諸島という島が沖縄にあって、たくさんの方が亡くなっています。その中で、人が死ななかつた島があります。それは前島です。日本軍がこの島を守ると言って上陸して来た時に、前島にいた校長先生が、「この島の住民は私が守ります。軍隊がいると戦争が起きるから」と言って、日本軍に撤退してもらいました。そのあと、米軍が上陸して来た時に、「この島には軍隊は一人もいません。うそだと思ったら、調べて下さい」と言って調べてもらったら、日本軍がいなかったので、「じゃあ、ここには手をつけません」と言って、島の人全員助かりました。そういう例があります。

それから、「9・11」の時に観光客はみんな沖縄を避けたのです。沖縄は攻撃されるかもしれないから。分かっているのです。軍隊があるところに戦争が起きる。標的になる。いろいろな学校の平和学習が「9・11」以降、中止になりました。沖縄は産業的にもすごい打撃を受けましたけれども、それ以上に辛かったのは、「今こそ、平和を学べる時じゃないですか。どんなに恐ろしいことが起きているか学べる時なのに、なぜそれを避けるの？ 私たち、そこに住んでいるんですよ。何で住んでいる人に会おうとしないの？」そういうことを感じました。軍隊があ

ることで戦争が起きるということを沖縄の人は感じているけれども、どうも日本政府は軍隊を、特にアメリカ軍を沖縄に置いておきたいらしくて、思いやり予算を年間2,000億円以上出しているのです。これは法的に根拠はないのです。出さないといけないものではありません。「思いやりです」と言っ出て出しているのです。アメリカ軍にとって、こんな美味しいものはないですよ。日本を守るためとか、アメリカを守るためとか、アジアを守るため、とか言っているけれども、どうやらお金がいっぱいもらえるからということが大きい理由ではないのかな、というふうには見えます。実際に戦略的なものだったら、グアムからでも充分だと、アメリカのほうが言い始めています。



普天間基地ヘリポートと辺野古の新基地建設
普天間基地は宜野湾（ぎのわん）市の中心 24%
（平良の出身地）

危険性と返還計画、その理由

- ・1996年：おじい、おばあちが座り込みを始める。
- ・2004年4月19日：本格的な辺野古での座り込み。完全非暴力の戦い。
- ・2004年8月13日：沖縄国際大学ヘリコプター墜落事故。
- ・2004年9月9日：海での戦いが始まる。非暴力の苦しさ。
- ・2005年秋からの闘い。

私が生まれたのは那覇市首里で、育ったのは宜野湾市です。普天間基地があるところです。今、話題になっていますね。本当に住宅が密集しているのです。「そんな基地があるところに住むからいけないんだよ」と言われることがありますが、逆ですよ。人が住んでいるところに基地が出来たのです。戦争中、ちょっと住めなくなったけれども、戻って来たら、基地があったという状況です。アメリカのラムズフェルド国防長官が、「世界一危険だ」と言いました。アメリカでは、米軍基地に限らず、全ての飛行機の

基地は民間の居住地区から最低何 km 以上離れていなければならないという規則があるのですけれど、国から一步出ると、通用しなくなるのです。自由なのです。それで普天間基地みたいなものが出るのですが、あまりにも危険だということが分かって、それを返還しましょうという話が1996年に出ました。危険な基地がそばにある普天間の人々は大喜びしました。けれども、その時に言われたことが、「代替地を用意しなさい。返還なら閉じればいいと私は思うのですけれど、なぜか代わりのものを作れと言って、名護市辺野古という場所が選ばれました。そこで、辺野古のおじい、おばあちがこんなところに基地を作らせてはならないと言って座り込みを始めました。もう少し言っておくと、普天間基地を返還すると言った理由は、表向きは周りの住宅地に迷惑がかかるから、こんな危険な場所、ということですが、実は逆の意味もあるのです。住宅地があって邪魔だから、もっと使いやすい場所に行きたいというだけなのです。住宅の皆さんに申し訳ないからではなくて、住宅の皆さんが邪魔だから、邪魔者のいないところに行きたいと言っているのです。住宅地の皆さんがどいてくれたら、普天間基地は残ったのでしょうか。でも、あそこはベトナム戦争より前から使っている基地ですから、コンクリートが古くて、ボロボロなのです。しかも、戦争で実際に使われていますから、薬品とか化学兵器とか、いっぱい染み込んで、汚染されています。そんな場所を米軍は使いたくないのです。なので、もっと使いやすい、安全なものがほしいと言って、「普天間基地を返還するから、代わりのものをちょうだい」と言い出していることが分かって来ました。それを容認するわけにはいかないということです。

辺野古で座り込みが始まりましたが、よく「この命の海を戦争のために使わせてはならない」と聞きます。基地被害に遭うとか、戦争で被害に遭うことは絶対にあってはならないけれども、どうにもならない、仕方がないということは歴史の中で経験して来ました。今後もあるかもしれない。けれども、加害者になるということは、

仕方がないでは済まされない。加害者になることを諦めて受け入れてしまっはいけない。今まで沖縄にあった基地については、沖縄の人は不幸なことに慣らされている部分があるのです。あって当たり前のように感じている部分があるかもしれない。でも、新しい基地を作るとなると、怒りが出て来ます。「これ以上バカにするな。私たちが被害者にも加害者にもするな。」こうして座り込みが始まりました。2004年4月19日にこれから本格的な工事が始まるという通達があったために、辺野古で何百人という人たちが集まって、実力で工事を阻止して、それが現在まで続いています。

すごく大変な座り込みでしたね。最終的には、海の方から工事の船が来るので、道路をいくら封鎖しても止められない。そうすると、みんな海に行って、そこで封鎖するのです。小さなカヌーに乗って行ったりして。最初の日、みんな怖くて、海に飛び込めませんでした。工事用のボートとかが来る中で、海に飛び込むということは、命を投げ出すことです。スクリューに巻き込まれたら、あつという間に、体が切り刻まれますから、怖くて飛び込めません。その中で、工事用のボートが工事の場所を決めるブイを海に落とす。落とさせないように必死で食い止めたのですけれど、1個落とさせてしまった。1個落とすということは、工事がそこでスタートしたという証明になるのです。4月19日に海に出て行って、必死に止めようとしていた人たちは泣きながら戻って来ました。「おじい、おばあたちが8年間座って止めていた工事を、私たちも頑張ったけれども、とうとうブイを落とさせてしまった。工事をスタートさせてしまった。工事を許してしまった。おじい、おばあ、ごめんなさい」と言って、そこで泣き出してしまいました。そうしたら、おじい、おばあたちが、「いいよ、いいよ。あんたたちが必死で頑張ったから、ブイが1個で済んだんだよ。」実際に工事を本当に始めたら、ブイを何十個か落とさなければなりません。「あんたたちのせいでないよ。おじい、おばあたちはこれからも頑張るから、あなたたちも一緒に頑張ろうね。」そういう

海の上の闘いがずっと続いています。

だんだん闘いが激しくなっていって、ドンドン海に飛び込んで行くようになりました。ところが、工事する方は、だんだん気持ちがずさんでくるのです。「戦争は人間を人間じゃなくする」とはよく聞きますが、戦争の準備をする人も、人間じゃなくなる。「そこで浮いている人がいる。泳いでいるから、ここで工事しないで下さい」と言っているのに、見えないふりをして、ボートが近づいて来るのです。時には、後ろ向きにスクリューを向けて近づいて来ます。それから、水中での工事が始まった時に、もぐって止めようとする、その真上でボートを停めて、浮き上がって来られないようにする。酸素ポンベを背負ってもぐって、一生懸命行動をしていたら、ポンベの栓を締められてしまうとか。よく人が死ななかつたと思います。そういう闘いがずっと続いていました。

そこで申し合わせたことは、先ほどの阿波根昌鴻さん(もう亡くなられました)が教えてくれた非暴力の闘いを私たちは貫く、ということです。たとえば、海の上で人が殴られて、意識不明になって沈んでいた時、その人を病院に連れて行ったら、息を吹き返した。工事をしている人たちに、その報告をする。「あなたたちが殴った人は、息を吹き返しました。もうあんな危険なことはしないで下さい」と一言言うのがものすごく苦しかったのです。「殴りかかりたかった。『お前の手で、あいつが死にかけたんだぞ』と言いたいんだけど、必死でこらえた。非暴力の闘いはこんなに苦しいものかと思った」と言っていました。けれども、戦争という最大の暴力を阻止するために私たちはやっている。だから、そこで暴力を使ってしまったら、この辺野古の基地建設計画が白紙になったとしても、自分たちの負けだ。だから、私たちは絶対に暴力を使わないということを徹底してやっています。

座り込みの中でいろいろな言葉を聞きました。「私たちは基地建設に反対しているのではない。戦争をここで阻止しているんだ。そして実際

10年以上、戦争を止めてきたんだよ」

「被害者になることは我慢したりあきらめたりすることもできる。けれど、加害者になることは我慢ができない」

「戦争には勝者はいない。勝っても負けても傷を負う。けれど命を守る闘いに敗者はいない。基地建設ができなかった人たちも、『命を守る選択をできた』と共に喜ぶことができる」

「必ず勝つ方法が1つだけある。それは勝つまで続けることさあ」



知られていない高江での闘い

今、辺野古での闘いと平行して、高江というところでも同じような闘いが続いています。オスプレイの配備が予定されている場所です。政府はまだそういうことを一言も言いません。でも、オスプレイを普天間の次に高江に配備しようとしていることは、もう何年も前から高江の人たちは気づいています。工事の設計図がオスプレイ用の設計図になっていますから。でも、日本政府は「知りません。聞いていません」と言い続けていました。それで、ずっと座り込みが続いていて、実際に逮捕者が出たりもしています。でも、ほとんど報道されていません。そう言った状況が、沖縄で続いています。



沖縄から「見えてくるもの」

時間がないので、随分かいつまんでお話ししています。「あなたはウチナンチュですか、それとも日本人ですか？」と聞かれた時に、私はすごく迷います、一つは、母がヤマトンチュ（和歌山県出身）だということで、両方の遺伝子が私の中にあるからです。兄は沖縄でずっと闘ってきましたので、何のためらいもなく、「ウチナンチュですよ。沖縄人ですよ」と言います。もしかしたら、「日本人じゃないのですかね？」と言われたら、「はい、日本人ではありません」と言えるぐらい強いものを持っているかもしれません。私は、自分の中に両方あるなあと感じます。ただ、沖縄の歴史とか現状を見た時に、日本人

であるということに嫌悪感を持つことがあるのです。踏みにじっている側だからです。私はウチナンチュとして生きていくことを選ばなければいけないのではないかなあと思うこともよくあります。どうして沖縄は翻弄されてきたのか、沖縄に基地が集中する本当の理由、これは、賛否両論あると思いますけれど、一番感じるのは、日本が沖縄には基地を置いてもいいと思っているからだと思うのです。たまたまアジアの便利な場所にあるからという以上の理由だと思います。もともと日本でなかった島国を、日本は自分たちの都合で取り入れたり、切り捨てたりして来た、それが今も続いているのではないかと。沖縄にだったら置いてもいいという感覚が、少なくとも日本政府にはどこかあるのではないかと。沖縄を今でも植民地だと思っているのではないかと。そこまで思っている沖縄の人は少ないかもしれない。けれども、どこかで「ああ、また日本に踏みにじられた」ということを、いつも政府が発表するたびに感じている。「沖縄は大変ですね」とよく言われるのですが、もどかしいですね。沖縄が大変なのでしょうか？ 私は根が優しい、多分、平和主義者なのです。争いたくないという思いが強くなるから、なかなか本音を言えないのですが、それが沖縄では問題なのです。たとえば、普天間基地を県外移転と言うか、撤去と言うか、もめます。「普天間基地そのものが要らないのだから、撤去だ、閉鎖だ。国内外のどこにも要らない。どうしても必要な国外に持って行ってくれ。」これはとても分かりやすいし、多分、平和主義の私はそういう思いが絶えずあります。要らないのだから、なくしましょう、と。ただ沖縄の人たちは、「県外に置いてくれ。県外が引き受ける」という思いが強いのです。それは、これ以上沖縄に押しつけるな、という思いがあるからです。「あなたたち日本が沖縄に置いているのだ。なぜ『沖縄に連帯する』と言いながら、自分たちで引き受けようとししないの？」という思いがすごく強いです。ですから、沖縄の中でも、県外移設という言葉に対して、賛否両論出る中で、私の平和主義の優しい部分は、基地撤去と言いたいけれど、怒

っている沖縄の部分は県外移設。「どこかの県でなぜ引き受けないの?」と思っています。



プロテスタント宣教 150 年とは?

2009 年、日本ではプロテスタント宣教 150 年を記念するイベントがたくさんなされました。確かに 1859 年に横浜でプロテスタント宣教が始まりました。でも、「琉球では 1846 年にプロテスタント宣教が始まっていて、受洗者も出ている。そのことで、2009 年をプロテスタント宣教 150 年と言うのはおかしい」という意見もありました。キリスト教会まで沖縄をないがしろにするのか、と。けれど一方で、「そのころ、沖縄は日本じゃなかった。あとで日本が侵略したのだということ明らかにするために、1859 年を日本の宣教開始とすればいい」という意見

もあります。これは沖縄の中でも意見が分かれます。どちらが正しいかではなく、そういったことがある、ということを知っているべきではありません。無批判でいてはならないのです。



おわりに

どうして沖縄はこんなに翻弄されてきたのでしょうか。おそらく日本の側に、「沖縄は植民地である」といった感覚がまだあるからなのではないかと思います。「沖縄は大変ですね」と言われるたびに感じるのは、「大変な状況を生み出しているのはどっちでしょうか。今、本当に大変なのはどっちなのでしょうか」という問いです。

沖縄を知る、ということは、自分たちを知る、ということなのだと思います。

参 考 文 献

『沖縄にこだわりつけて』 平良 修著 新教出版社 2,625 円

『小さな島からの大きな問い キリストとオキナワにこだわる一牧師の平和論』

平良 修著 新教出版社 2,100 円

『命こそ宝 沖縄反戦の心』 阿波根昌鴻著 岩波新書 550 円

『世界』(2012. June No.831) 特集: 沖縄「復帰」とは何だったのか

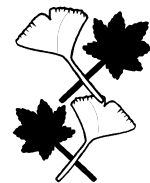
岩波書店 840 円

『沖縄ノート』 大江健三郎著 岩波新書 620 円

『戦さ場と廃墟の中から 戦中・戦後の沖縄に生きた人々』

発行: 日本キリスト教団沖縄教区 2,000 円

『証言 沖縄「集団自決」』 謝花直美著 岩波新書 777 円



社会委員会からのお知らせ

9月30日(日)礼拝後、社会委員会学習会を開催します。

「被災地を訪れて」というテーマで、東北の被災地を訪問された体験をA.T姉とN.N兄にお話していただきます。多数のご参加をお待ちしております。